

私たちは皆
仏の化身である

The background of the entire page is a complex, repeating fractal pattern in shades of red and pink. The pattern consists of many small, star-like or floral motifs that are interconnected, creating a dense, textured effect. The colors range from a deep, vibrant red to a lighter, almost white-pink at the edges of the fractal branches.

プロローグ

創造

清浄と汚濁の中から
生まれ出づるもの

レッド 生命力の象徴

$$\sum_{n=1}^{10} 2^n = 2046$$

2046名

私たち一人一人が生を授かるために
存在した十世代の祖先の数の合計である

夕刻には
上野に向かった

その夜は
久しぶりに
学生時代の仲間達と
約束があった

上野公園にて
西郷像に会釈した後
マルイを過ぎ
アメ横の雑踏を
脚を引きずりつつ
目的の伊多利飯店に着いた

時の流れをまるで感じさせぬ
彼らがそこにいた

変わったのはたぶん私の左足だけだ
約2年前に
悪性腫瘍の摘出のために
私の左下肢は
まるで柔軟性の無い金属の棒へと置換された

「結構 歩けてるじゃん」
「シュワちゃんに 歩き方 教わったのよ
俺をターミネーターと呼んでくれ」

交わした挨拶の中に
リハビリをしていた頃の自虐的な響きは
もはや感じない

十年を
とうに過ぎた歳月は
「家庭」というものが
かもし出す
濃厚かつ豊穡な香りを
いやおうなしに
彼らの所作 言端から
私に嗅ぎ取らせた

しかるに
私は
弁舌の機会を
失い

かくて
ワインを重ねるうちに
「今」ではなく
これまで語り尽くし
笑い尽くした
「あの頃」の話に
追随することとなる

なんと
私は
無邪気で
野心家で
卑猥で
横暴で
そして
純粹だった

かつて
そして
今も
かように汚濁の匂う男が

神聖なる御魂に触れるべく
仏法を行じようとは
この場のだれも
思いよらぬことである

今 何をしてるの
友の問いかけに
やはり
少し口は濁った
仏道を行じるには
まだ決定心が足りぬ

日付が変わる頃
店を出て
宿泊予定のホテルまで送ってもらった

じゃあ また
あの頃
彼らとの「次ぎ」が来ることは
疑いの余地がなかった

当然のように
再会し
飲み
騒ぎ
別れ
しばし時が過ぎる

けれど
いつのころからか
私は
自分にとって
大切な出会いの
去り際
別れ際に
ある種の意味を持たせるようになった

ああ
なんと言うのか

今から１００年前
２０世紀を迎えた頃
私も友も
現在の肉体を持たなかった

私たちの祖先が
今は
土となり
海へと霧散した
旧き肉体を持ち
日露開戦
第一次世界大戦の動乱の世を生きた

今から１００年後
２２世紀を迎えた頃
やはり
私も友も
現在の肉体としては存在しない

新たな肉体に宿った
私たちの
子孫がこの地を踏むであろう

創造

～清浄と汚濁の中から生まれ出づるもの～

はるか

はるか遠い昔から

私たちは

脈々と

そして

脈々と

命が

受け継がれ

そして

受け継がれ

この時代

この地に

生を受けた

やがて

当たり前のように

成長し

偶然のように

出会い

結ばれ

新たな生を宿す

避けようもなく

祖先と同じように

私たちは土に帰り

避けようもなく

時代は次ぎの世代へと

受け継がれる

動かし得ぬ真実として
肉体を持つ私たちは
時間的に
そして
空間的に
有限であり
矮小である

一方
私たちは
とうとうと
流れ
そして
たおやかに
満ちる
永遠の生命の大河を
織り成す
荘厳な存在でもある

久しぶりに
私と友が共有した
たわいもない
本当に
たわいもない
時が存在するためにも

数え切れぬ
そうだ
そうなのだ
数え切れぬ
私と友の
それぞれの
祖先の存在が必要であった

この時代
この地に
私と友に
生を授けてくれた
彼ら

彼らのうちの
一人でも欠け
次ぎの世代への生が絶えていれば
私と友が過ごした
この夜はなかった

父と母
祖父と祖母
曾祖父と曾祖母
曾々祖父と曾々祖母

どんな
楽観論者であろうとも
彼らが皆
一人残らず
満ち足りた
そして
喜びあふれる人生を送り
天命を成就したと
断言することができようか

悲哀
憎悪
貧困
飢餓
病苦
絶望

私たちを
取り巻く
時代の風景が
いかに変わろうとも

彼らは皆
現在の私たちと
本質的には
何ら変わらぬ
人間としての苦悩を抱え
その時代
その地を
生き抜いたはずなのだ

今
生を受けた
私たちが
どんなに
高貴な家の出であっても
どんなに
卑しまれる家の出であっても

富めるとも
貧しくとも

健康であろうとも
障害を持とうとも

いかような
境遇にあらうとも
私たちの一人一人が
この世に生を受けるためには
数え切れぬ祖先たちの
苦悩と汚濁に満ちた生涯がある

絶望感に打ちのめされ
いまわの時を
迎えざるをえなかった
私たちの祖先の魂の火は
今なお
救いを求め
くすぶり消えぬ

私たちは皆
私たちは皆
生まれながらにして
汚濁の存在である

そして
汚濁にまみれた
私たちの存在は、
たおやかに流れゆく
永遠の生命という
清浄なる真理とともにある

それは
それは
奇跡であり
荘厳であり
神聖である

私を見送ってくれた友の姿を
ホテルの一室で
想い浮かべ
私は
しばし読経し
瞑想した

硬質な空間の中で
読経の音が
鼓動のように
重なり 合い
うねり 高まり
引き 静まる

私の前に幻出した
「何者か」の鼓動は
やがて
私の胸の内と同化し
ふと
思いは一千年後のこの星の姿に飛んだ

一千年後の私たちの子孫は
無事に
「彼」が説いた
法にまみえることが出来るだろうか

いまだ
酔いの覚めやらぬ
私は
ある一節を
ノートブックに書きつけた

私たちは皆 仏の化身である
清浄と汚濁の中から生まれ出づるもの

それは
私の外界に存在したものを
すくい上げたのではなかった

ずっと
ずっと
はるか昔から
この時まで
私の内なる世界を浸していたのだ

そんな
ナルシスティックな想いが
しばし
私の胸をよぎり
想いは
やがて
確信へと変わり
信念として
私の肉体を
激流のように
貫き
突き動かし

時に論的に
時に詩的に

時に音的に
時に色的に

時に理的に
時に狂的に

「一遍の詩」を
私に描写させたのである

第1幕 文明

西欧哲学を築いた巨星たち

イエロー 知識の象徴

「その男」が
地上に出現する
はるか昔から
哲学なるものは存在した

考える動物として
ヒトが誕生して以来
外界の存在
そして
内的宇宙に対する
想念
思考
思索
苦悩は
ヒトの存在とともに
途切れることがなかったのであるから

その巨星の出現により
西欧における哲学は
今日の体系を持つ
サイエンスへと
華やかに分化したのである

偉大なる巨星
ルネ デカルト
16世紀末
フランスにて生を受けた

学問の「あるべき姿」を
彼は提示する
「明晰なる真理」に到達するために

一つ
自然界に存在する
あらゆる対象を
まず
疑い
疑いぬく

二つ
完結した
全体世界より
切り取った対象を
細かく砕き
測り
比し
分析す

三つ
結果
得られた
真理の断片を
つなぎ合わせ
堅牢なる体系を
「己にとって」矛盾なきよう
再構成する

四つ
新たに構築された思想体系は
いかなる時においても
どの地においても
だれにとっても
真であるという
再現性を尊ぶ

彼は疑う
万象を
疑い
疑い
疑いぬき
不確かなる真理の皮を
すべて
剥ぎ落とす

暖炉の前で
既存の
すべての
思想体系が
あやしく揺れた

人間が知りうる
真理なぞ
幻想であったのか

失望の縁で
ついに
彼は
疑念渦巻く
己の精神だけは
確固として実存するという
真理に直面するのである

コギト・エルゴ・スム
われ思う
ゆえに
われあり
思弁の対象たる
自然あるいは宇宙が
精神そして物質から成る
二元的世界に分離された瞬間であった

彼の提示した方法論による
学問において
客観的に明示できぬ
精神はその対象とはなり得ない

かくて
物質を基盤とする世界に対する
執拗な考究が
今日のサイエンスへの扉を開いた
後世
人類は
彼を近代哲学の祖と称するに至る

しかし
いつ
いかなる場合においても成立する
「因果律」によってのみ
構築された思想体系
すなわち
既存の西欧文明だけでは
宇宙の全存在を表現しえぬことを
我々はすでに経験的に了解済みである

「因果律」のように
明瞭な原因と結果をもたず
しかし
くっきりと
我々の人生の一こま一こまに
浮かび上がってくる
無限の関連系

そう「因縁」だ

「因果律」だけではなく
我々にも明瞭に語ることできぬ
「因縁」によっても
この全宇宙は支配されている

しかし
それに触れるのはまだ早い
話をもとに戻そう

デカルトの晩年
17世紀の大英帝国にて
物体の運動法則を
明晰に記述しうる
数学を建設すべく
比類なき才能が
誕生した

アイザック ニュートン

運動力学
光学
天文学
八十余年の生涯において
彼が集大成しえた
広域かつ
深遠なる
哲学体系
それは
生身の人間の成せた業とは
とても思えぬほどである

以降
三世紀もの間
その力学体系は
近代科学が進む道を
照らしつづけた

彼が築いた数学は
明晰にそして決定論的に
自然を記述しうるはずであった

が
その誕生当初から
ニュートン力学によっては
解けぬ問題が
存在していたのである

三体問題

一つ
あるいは
二つの
天体からなる系の振る舞いは
疑問の余地なく
解を得ることが出来る

しかし
三つ以上の天体からなる
非線系と呼ばれる方程式の
すべての振る舞いを
陽に解くことは
三百余年にわたる
数学者達の登頂を
拒みつつけてきた

不毛とさえ思えた
挑戦の中
19世紀末
スーパーノヴァが爆発する

異能の
フランス人数学者
アンリ ポアンカレ

ポアンカレは
彼の出現以前の
数学者達にとって
当然すぎるほどの
方程式に対する思考態度に
根底的な変更を迫った

解く
～方程式より
明晰に「定量的な解」を求むること～

彼は
方程式から
確固たる明晰な解を求むるかわりに
方程式が取りうる
すべての可能な解の集合から構築される
全体的構造を明らかにすることを
目指したのである

木ではない
森を見よ

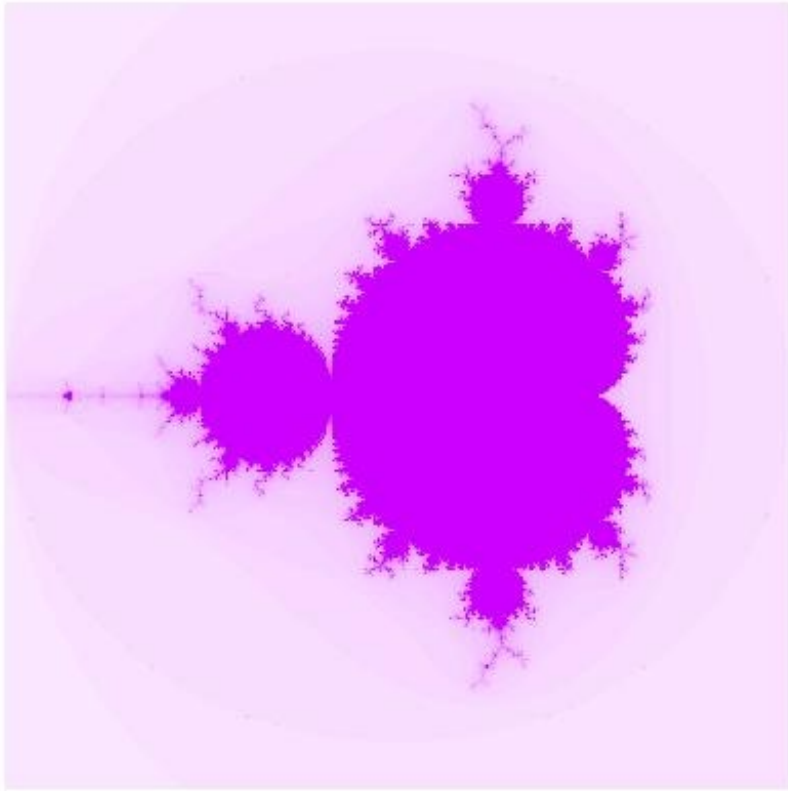
深い
深い
森の奥に
ひそむ
彼が覗き見た
複雑極まりない世界

今日
私たちは
それをカオスと呼ぶ

あまりに入り組み
あまりに込み入る
その数学的宇宙を
可視化することは
ポアンカレの時代には
望むべくもなかった

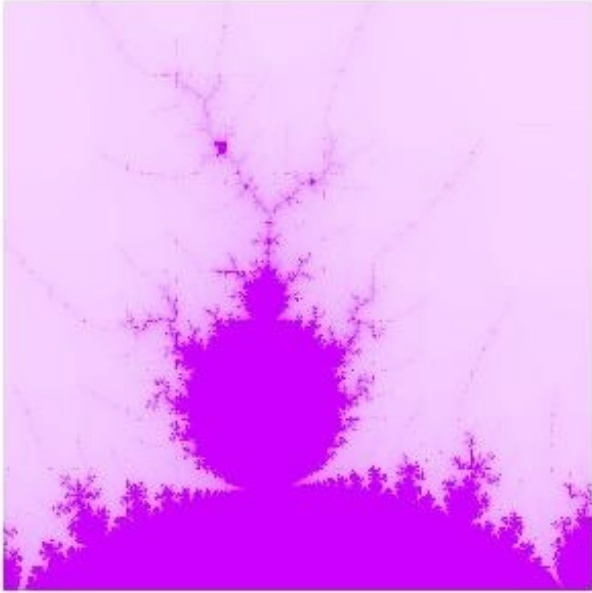
しかし
百年の時を経て
20世紀末
コンピュータサイエンスの時代が到来し
強力なグラフィックスパワーにより
その全貌がついに
私たちの前に現出したのである

マンデルブロー集合

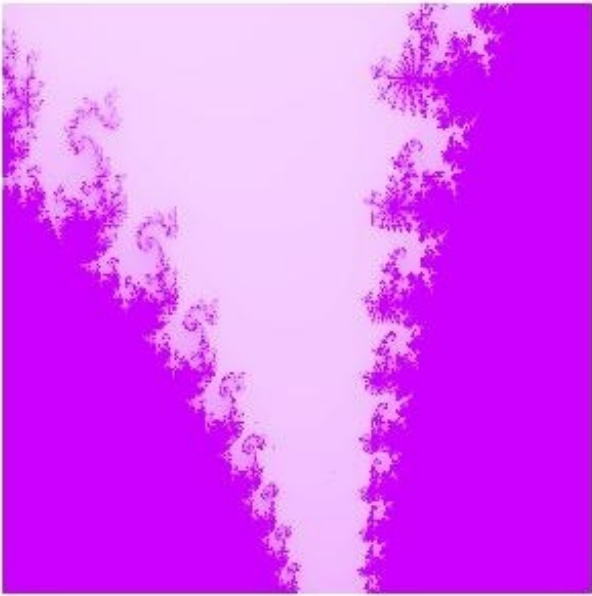


その造型は
先天的に
ヒトを
heart の連想へと
いざない

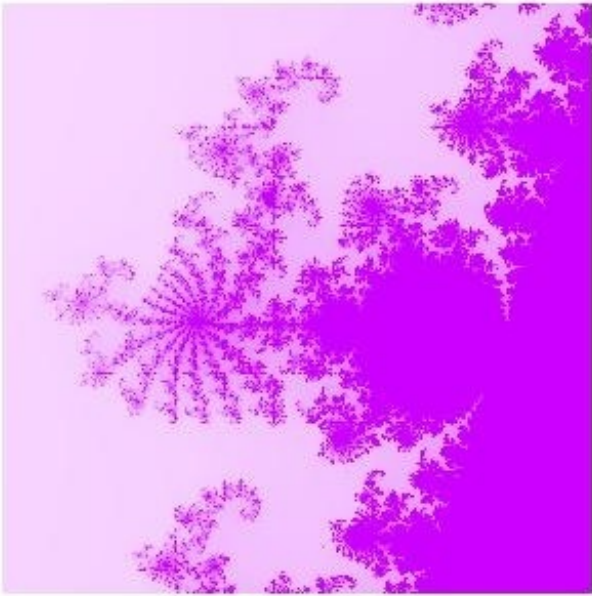
引き伸ばすたび
拡大するたび
限りもなく
底もなく
果てるともなく
もとの像が
現出する
自己相似の夢幻的宇宙に
我々の魂を漂流させる



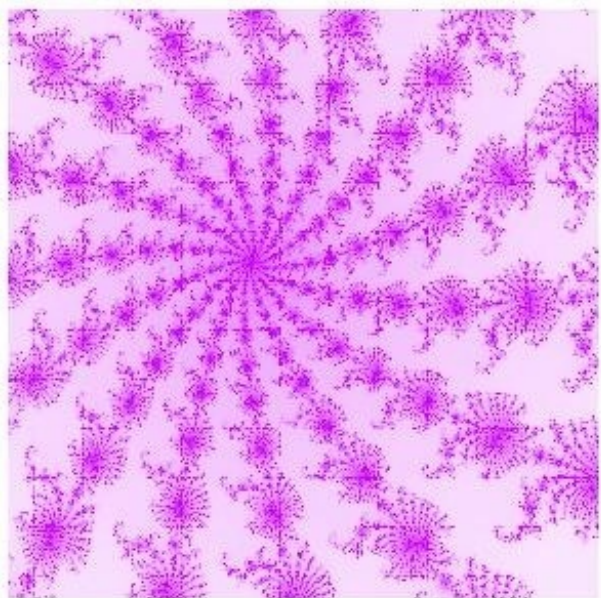
マンデルブロー集合の拡大



ぞう



たつのおとしご



くも

全体が部分を成し
部分が全体を成す

やがて
その自己相似な
数学的構造である
フラクタルは
東洋の仏法に通じた者に
少なからぬ
衝撃をもたらした

西欧の先端理論によって
産み落とされた
美しき数学的概念が
東洋にて
古より伝えられた
仏教思想とのアナロジーを
十分に
想起させたからである

一の中に一切を含有し
一切の中に一が遍満する

自己相似とは
まさに
仏法的宇宙観であった



第2幕 仏法 東方からの光明

グリーン 調和の象徴

理解すること
この思策行為の
積み重ねが
今日の西欧文明を生んだ

視
聴
臭
味
触

ヒトは
己の五感により
対峙しうる
宇宙を
己が解しうる
記号により
記述し
積み重ねてきた

ヒトは
自然を記述するために
言語を
そして
数学を
生んだ

ヒトは
言語を
そして
数学を
手にしたがゆえに
自然を記述できる
存在となった

が
かように
積み重ねられた
哲学体系に
思想体系に
矛盾がないと
審判するのは
やはりヒト自身である

仮に
真理なるものが存在するとして
自然は
宇宙は
私たちが築いた数学により
明晰に表現しうるのか

そもそも
自然を記述する上で
今日
我々が手にする
数学を用いることは
果たして妥当であるのか

愚考とも思えた
その異端思想が
１９３１年
ゲーデルにより
証明される

ヒトが建設した
自然を記述する道具である
数学が抱えた不完全性
ならびに
人間理性の本質的限界が
露にされた歴史的瞬間であった

哲学歴史上

極めて重大な定理

「不完全性定理」を提示した

ゲーデルは

精神を病み

散った

そんな

天才の 苦悩など あざ笑い

高層 ビルディングは そびえたち

航空 旅客機も 飛び立ち

異郷で ポテチ

を ほおばる 僕を見るんだ

ビルに 突っ込む 航空機

突如

殺戮される ヒト

「正義」の

報復受ける ヒト

ソクラテス以降

二千五百年

ヒトが営々と積み重ねた

思想体系に矛盾はなかったか

矛盾などない

それは自己暗示に過ぎぬ

理解すること

たぶん

それは

ヒトの思索活動のすべてではない

自らが創設した

言語を

そして数学を用いて

好奇の対象を理解するための努力を

ヒトは続けてきた

やがて

かような煩悩を成就するために

こしらえられた二元論により

精神は物質の存在から孤立した

ゆえに

置き去りにされた精神は

勝って気ままに

暴走し

連綿と

そうだ

連綿と

文明の歴史とともに

罪を重ねてきた

悟ること

直感的に

瞬間的に

真であることに

意識が到達する

精神と物質の一体化

己と宇宙の一体化

それは

証明を要さず

語ることも不能であり

しかるに科学的ではない

が

真理でもないとは

神ならぬヒトごときに

誰も

いかようにも

審判できぬ

文明の繁栄と引き換えに

蹂躪された

悟る行為

古より

東洋では

もう一つの

ヒトの思索活動

悟りを

追及した哲学が

建設された

仏法である

紀元前五世紀
ギリシャにて
ソクラテスが
近代文明の源流となる
哲学を模索し始めた頃

東方の
インドーネパールにて
「彼」は
ヒトとして降臨した
釈尊
歴史的実在としての名は
ゴータマ ブッダ（目覚めたヒト）

はじめ
「彼」が説いた
教えは
無論
信仰であり
救済であり
宗教であった

空（くう）

すなわち
あらゆる存在は
自立的に
絶対的に
存在するのではなく
相互に依存しあう
他者との
無限の関連系の中にある

よって
あらゆるヒトの苦悩も
苦悩自身が
独立して存在するのではなく

何ものかが
あたかも
そこに
絶対的に存在するがごとく
錯覚し
執着する
煩悩の中に宿る

煩悩を断ち
苦を滅せよ

ゆえに
「彼」は
解脱への行を説き
慈悲の行を説いた

「彼」が開いた
善く生きる
ための教説は
やがて
宗教のみならず
独自の宇宙観をも含有する
哲学体系として発展し
インド
中国
そして東方の島国
日本へと継承されてゆく

歴史的肉体を持った
「彼」が滅した後
さらなる
解脱への道を追求するもの
と
さらなる
慈悲の道を追求するもの
とに別れた

解脱

己の完成を目指し
ヒトとしての肉体を持ち
かつ
全宇宙との一体化を図る

己を仏とする全能感
あくなき
解脱への行は
密教として昇華された

密教的修行の一つとして
陀羅尼求聞持法（だらにぐもんじほう）がある

仏法における
陀羅尼（真言）は
古来
全宇宙との交信を
可能にする言語と考えられてきた

陀羅尼（真言）を唱えつづけ
やがて
その真言の音声バイブレーションは
言語を超えてヒトの内的宇宙と共鳴し
全宇宙との一体感を得るための
無限の浴槽となる

慈悲

他者への奉仕の実践を迫り
あらゆる衆生を救い
皆で彼岸へと渡る

世界を救済するための
慈悲の行は
大乘として受け継がれ
やがて
その教えを
文字として後世に継承するために
象徴的経典として
法華経が生まれた

しかし
密教であれ
大乘であれ
その哲学的宇宙観には
同一性を観察しうる

この世に現出するものは
すべて対比する二面性を持つ

密教
そこでは
それを
金剛界であり胎藏界であると説き

法華経
そこでは
それを
妙であり法であると説く

法華 ～ 蓮の花

あたかも
汚れた泥の池から
首を伸ばし
咲いた
美しき清浄な蓮花のように

宇宙は
自然は
生は

時間があり空間がある
精神があり物質がある

昼があり夜がある
火があり水がある
男があり女がある
主体であり客体である
智であり理である

妙であり法である
法であり妙である

金剛であり胎蔵である
胎蔵であり金剛である

汚れた煩悩に直面し
地獄で苦悩するがゆえに
より清浄なる
深い悟りに到達することもできる

二千五百年前
菩提樹のもとで悟りを開いた
「彼」は
ベナレスの鹿野苑（ろくやおん）にて
ヒトに
初めての法を説いた

対比する二面世界に生きる
私たちが
悟りに至る道

それが
それが
中道である

＊脚注＊
中道
対比する両極端に近づかぬ思想・行為



第3幕 フラクタル 対比的二面宇宙

ブルー コンピュータの象徴

ここで私は
弥勒（みろく）について
語らねばならない

弥勒

釈尊入滅後
「彼」が
説き明かした
法が
忘れ去られた
末法の世に

五濁（ごじょく）の悪世を
救済するために
釈尊の継承者として
輪廻し
地上に降臨すると
約された未来仏

「彼」は
天上界にある兜率天（とそつてん）において
今も
法の道を説き続け
その下生の刻（げしょうのとき）にそなえている

仏法開教以来
地上にて生を受けた
数え切れぬ
行者たちが
弥勒がおられる
兜率天に往生するために
仏道を行じ
仏道を成じた

それは
西欧文明の
信仰的主柱である
イエス キリスト再臨による
神の国の思想をも
思わせる

弥勒到来を
高らかに謳いあげた
弥勒経

重々無尽に
交わり
展開する
仏法的宇宙観が展開される

一の中に一切を含有し
一切の中に一が遍満する

その
夢幻世界は
20世紀の
西欧の天才たちによって
美しき自己相似の
数学的構造
フラクタルの中に
時を経て
再び
見出された

$$f(z) = z^2 + c$$

z と c は複素数 $a + bi$ で表される

$$\text{虚数単位 } i = \sqrt{-1}$$

$$z_1 = f(z_0)$$

$$z_2 = f(z_1) = f(f(z_0))$$

$$z_n = f(z_{n-1}) = f(f \dots f(z_0))$$

かように

簡素なる

あまりに

単純なる

数式の反復により

最も複雑

かつ

最も美しき

数学的宇宙が

創出される

20世紀初頭

その宇宙の一端を

初めて覗き見ることを

神から許された

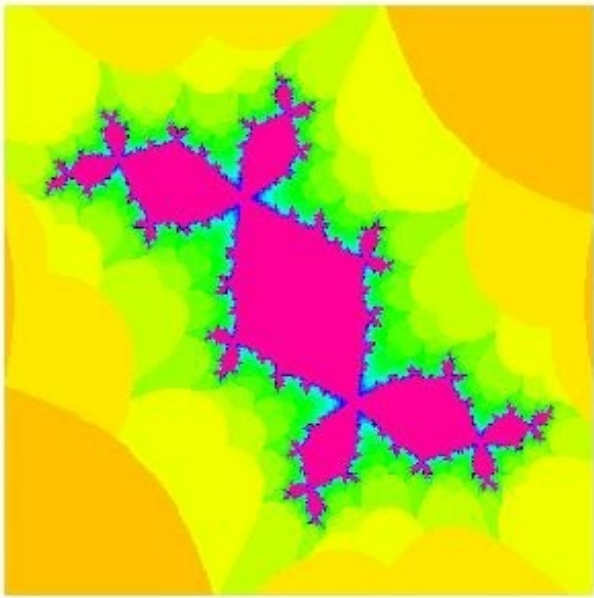
天才の名が

その造形美に冠された

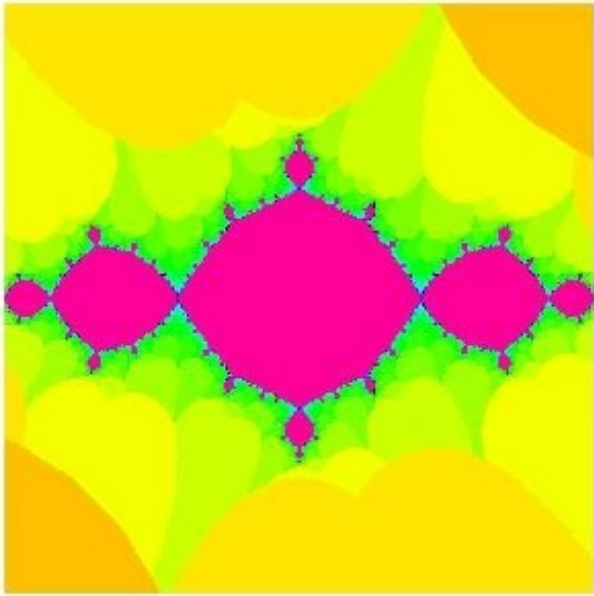
ジュリア集合

しばし触れ

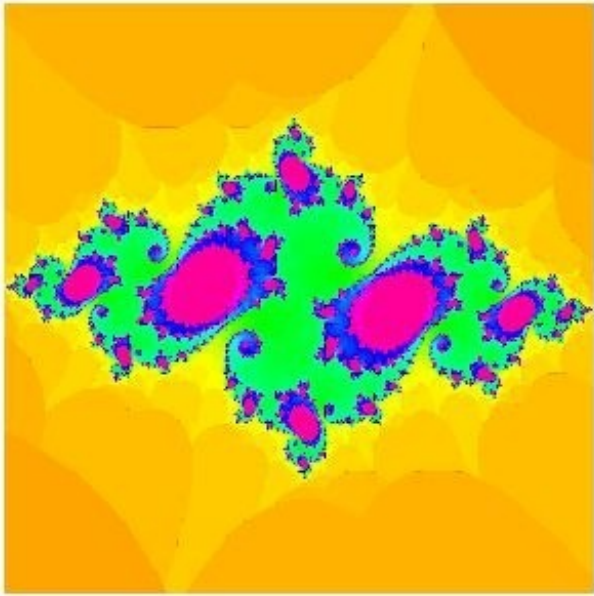
しばし感じよ



$c=-0.75+0.1i$ のジュリア集合



$c=-1$ のジュリア集合



$c=-0.122+0.765i$ のジュリア集合

$$f(z) = z^2 + c$$

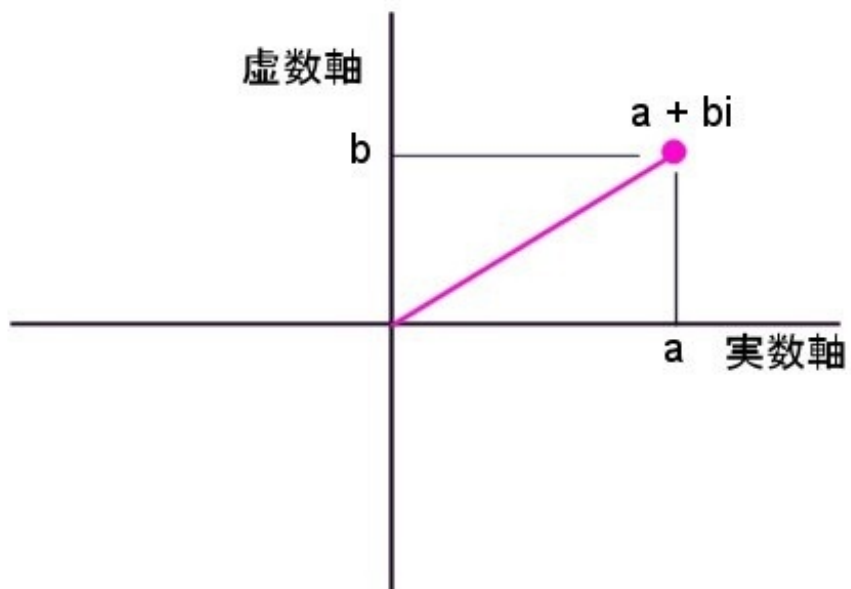
フラクタルである
ジュリア集合を生む
普遍的数式

しかし
cのうつろいにより
描き出される数学的宇宙は
気まぐれにうつろい
様々なペルソナを見せる

そして
うつろい揺れ動く
すべてのジュリア集合を
含有する総体
それがそれが
マンデルブロー集合である

20世紀末
ついに現代数学が描き出した
曼荼羅宇宙

いかにして
この数学的造詣が生まれるのか
この美に
観念的に
直感的に
己を同一化してみよう

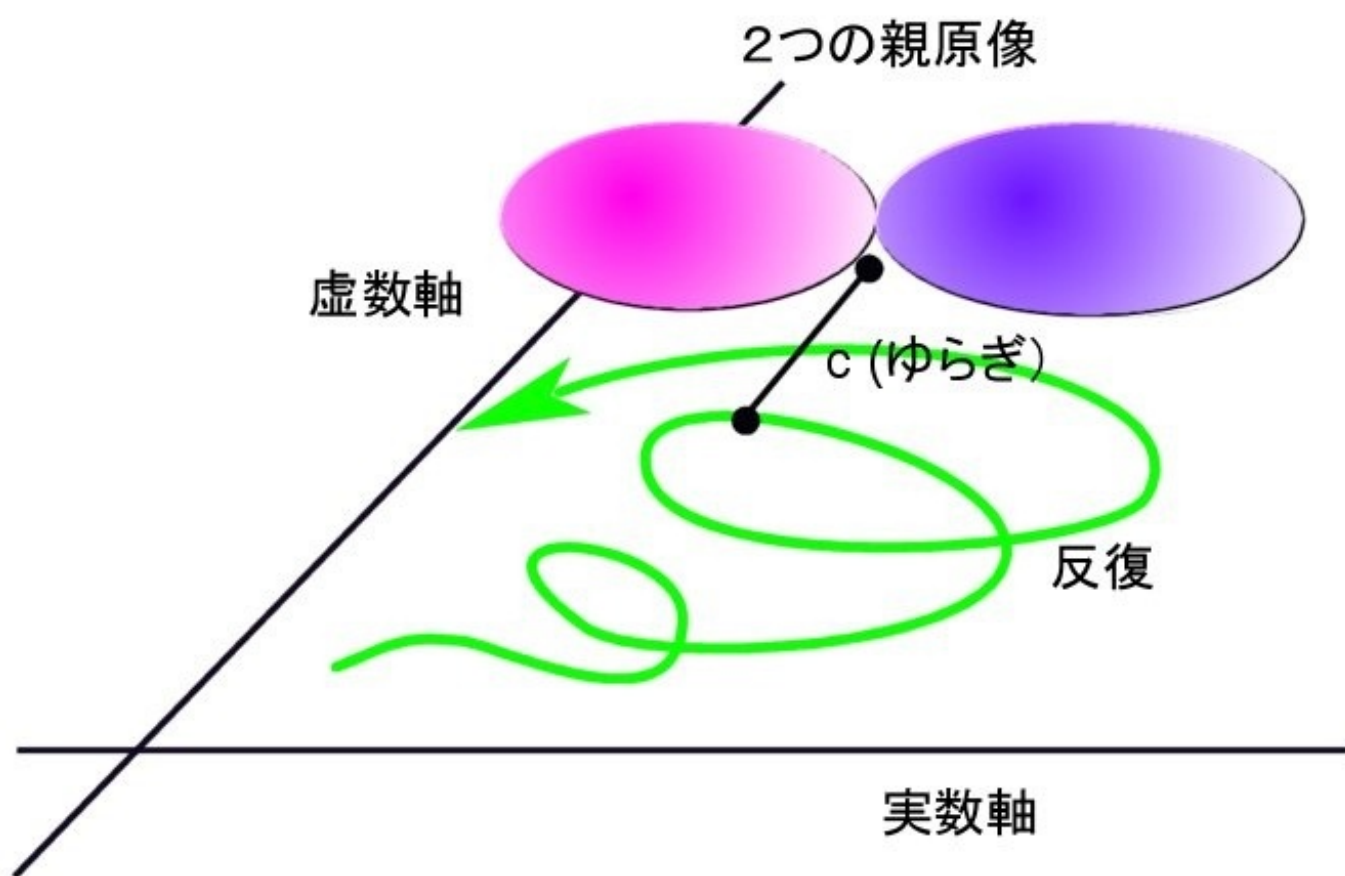


一つ

それは

実数 そして 虚数

対称的な二軸から構成される宇宙である



二つ

すべての子の解は
その親となる
二つの原像を持つ

三つ

その関数は
果てなく
繰り返し
反復される

四つ

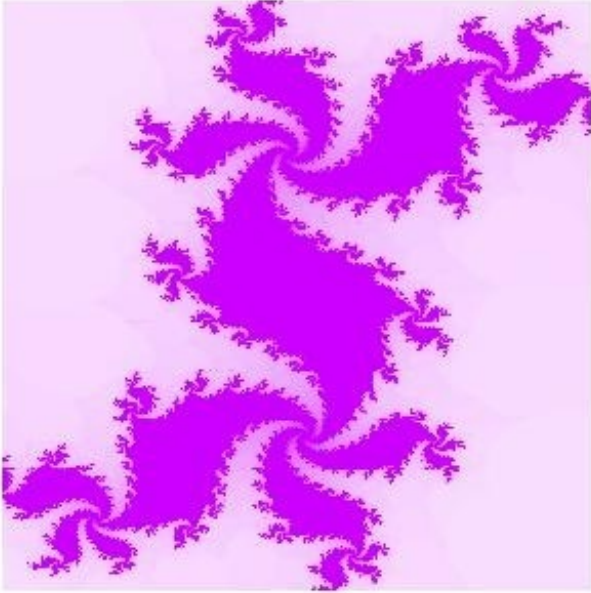
反復の間
 c の値の大きさにより
ある解は
領域内に
受け継がれ
美しき軌道を描きだす

そして

ある解は
無限遠のかなたに
飛び去り
再び帰還することはない

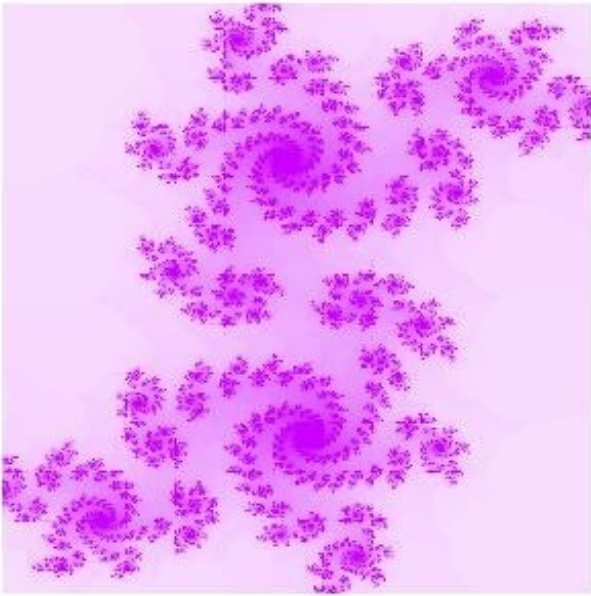
c の値の

精妙なるバランスにより
美しき造詣は霧散消滅する



cによるジュリア集合の散逸

$c=0.3-0.5i$ のジュリア集合



$c=0.3-0.48i$ のジュリア集合

かくて
対比的二面宇宙において
調和されたる美が
育まれ
創出されるのである

ああ
はるか
はるかなる
私たちの祖先は
それを
その美を
悟り
と呼んだ

第4幕
生命圈
妙法的宇宙

全色 S a t o r i

「私」とは何か

人生の草春期に
誰もが抱いたであろう
恐れ

それは
古代の哲人に限らず
自我を持ち
生を受けたヒトにとっての
永遠の命題である

少なくとも
私は
その耐え難き恐れを
己の
深き澱んだ淵に沈め
かくて
欺瞞の上に
日常を生きるという
四十年の刑を
本能的に
己に課した

「私は無益で精巧な一個の逆説だ。
この小説はその生理学的証明である。
私は詩人だと自分を考えるが、
もしかすると
私は詩そのものなのかもしれない。
詩そのものは
人類の恥部に
他ならないかもしれないから」

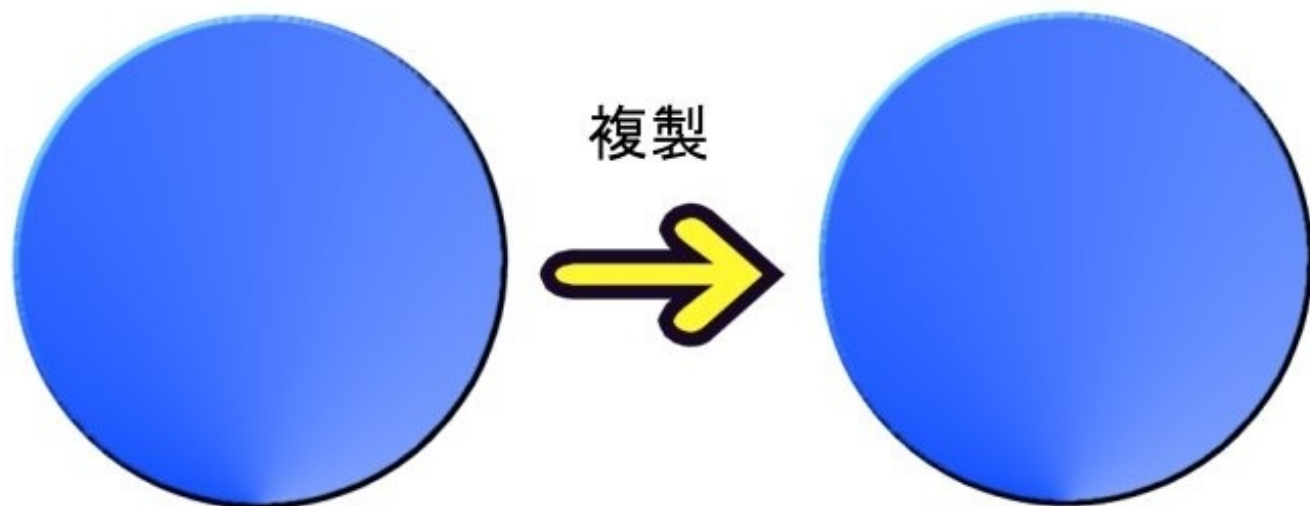
「仮面の告白」にて
三島は懺悔するのであるが

詩人として
我の
澱み汚れた淵に
潜んだ恥部を暴き
素描するにあたり
畏れを
はばからずに
刻明するなら

あまた
数え切れぬほどの
男と女

二つの原像の
果て無き反復を内在し
精神そして物質
不可分なる
対比的二面宇宙に投影された像
それが
私である
いや
私たちだ

その像は
うつろい
ゆらぎ
多様なペルソナを
私たち自身に
魅せる



正確に
複製し増殖する
単細胞のごとく
すべての
原像一遺伝子 が
すべて等質に
次世代へ
写像される一複製される のならば

果てなく広がる
鏡面同様
同一のカオ
すなわち
マネキンが不気味に複製され続け
地上を覆い尽くすであろう
無論
互いの識別なぞ
凡人の感覚には許されず

よって
我々は
distinctive existence（区別された存在）として
存在しえず

自我 コギト なるものは
そこにはありえない
と帰結する

しかし
見かけ上
まこと
見かけ上
幸福なことに

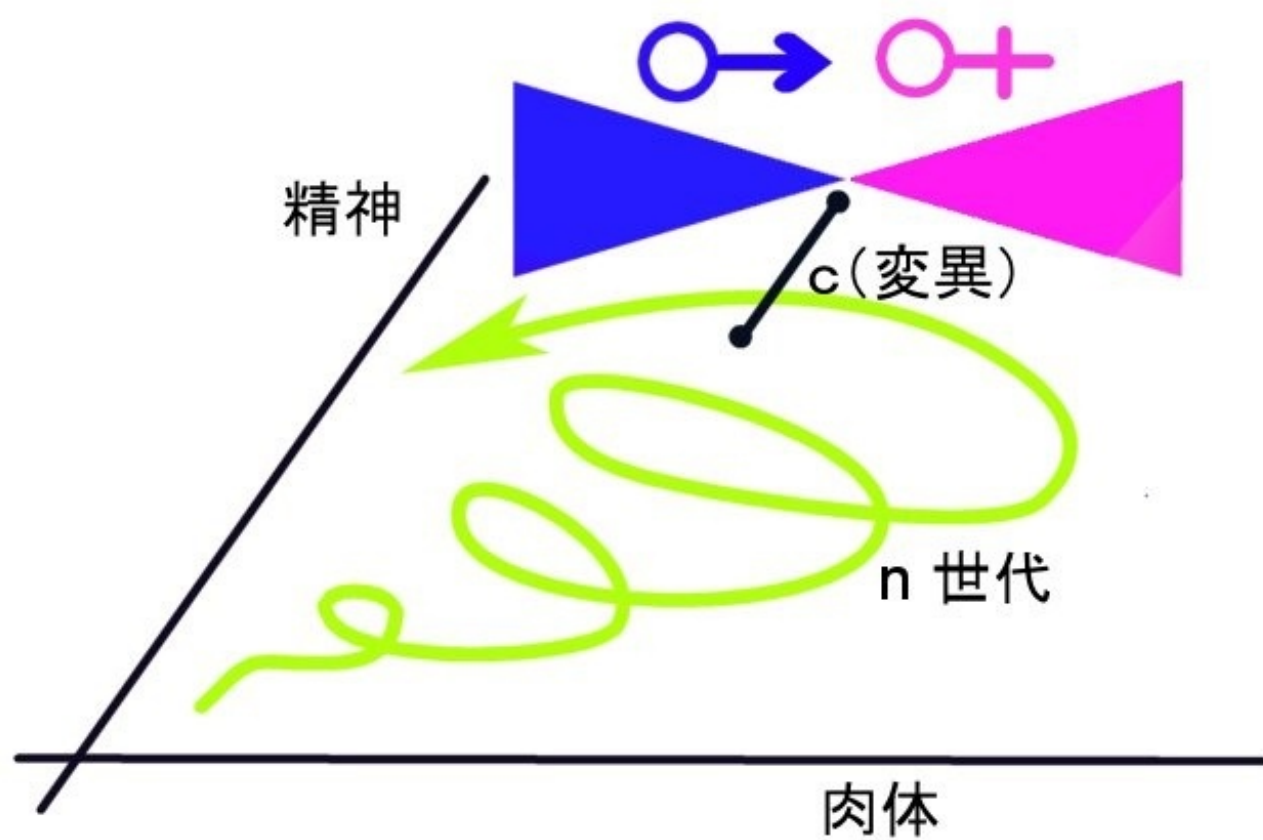
ほどなく
それは苦悩の起源でもあったことに
我々は歴史的に
ほぼ同意できるのであるが

我々には
オス　そして　メス
すなわち
性が存在したのであった

「二つの性が存在し
互いの交わりを獲得するに至ったことが
生物の多様性を生んだ原動力である」

生物学上の
この定理が
詩人を
ジュリア集合なる
数学的概念へいざなう

親となる
二つの原像一二つの遺伝的背景
次世代へ
あるものは
受け継がれ
あるものは
無限のかなたへ飛んでゆき
淘汰される



遺伝子
細胞
言語能力
行動パターン

あらゆる
階層を通じた
二つの原像のシャッフルと
継承淘汰の
反復の果てに
やがて
一本の樹木から
生まれ出づる仏像のごとく

精神ならびに物質から
構成される
二面的宇宙の中に
対称性を破り
くっきりと
浮かび上がる
彫刻

時空間に現出した
その仏像こそ
生存に適しうる肉体的特徴と
集団内に了解受容されうる
言語能力ならびに行動パターンを
備えた
パーソナリティである

そしてcだ

cなる

あやうき振幅（変異）の上に

もはや秩序と呼ぶには

あまりに

うつろい

多様で

はかなき美が

私たちの

肉を持って霊を持って

一人一人具現化されているのである

普遍性を内在する

対比的二面宇宙に

投影された

多様なペルソナ

それが私たち

distinctive existenceである

その美に

ヒトが

あえて言語を与えるなら

尊大なる表現が

むしろ的確であろう

私たちは

私たちは皆 仏の化身である

そう

私たちは

精神と物質から構築される

対比的二面宇宙を

時を越えて

幾世代も輪廻する

フラクタルな仏像なのだ

一方

客観的存在としての私たちは

その内部における宇宙

すなわち

意識をも有する

左目 右目

左耳 右耳

左手 右手

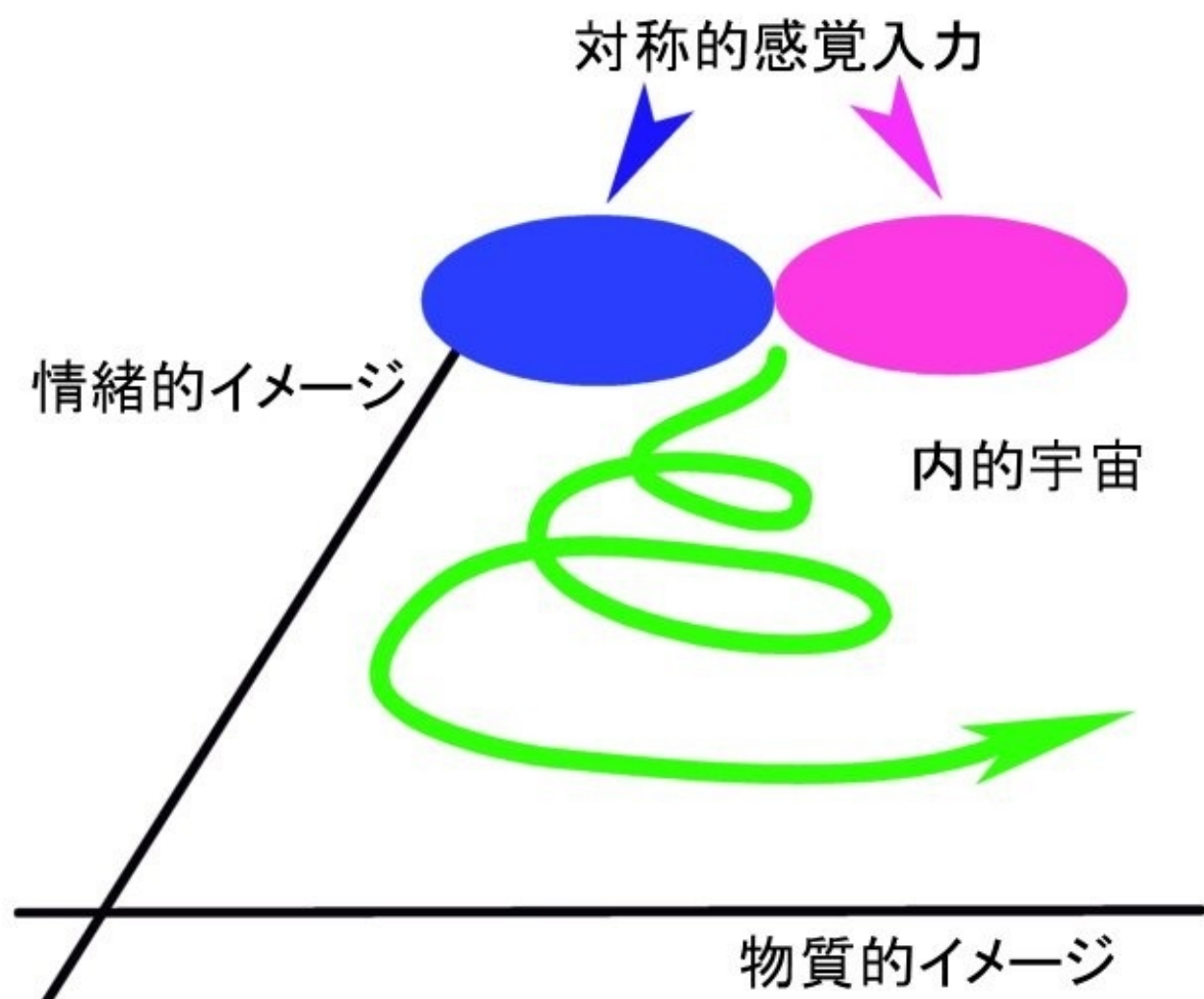
左脳 右脳

左右からの対称的感覚入力

左右対称の脳において処理され

私たち自身の内部においても

豊穡な対比的二面宇宙を浮かび上がらせる



やがて

二面的宇宙の住人としてのヒトは
宿命として
「経済」を
発明してしまう

悲しきかな

ヒトを

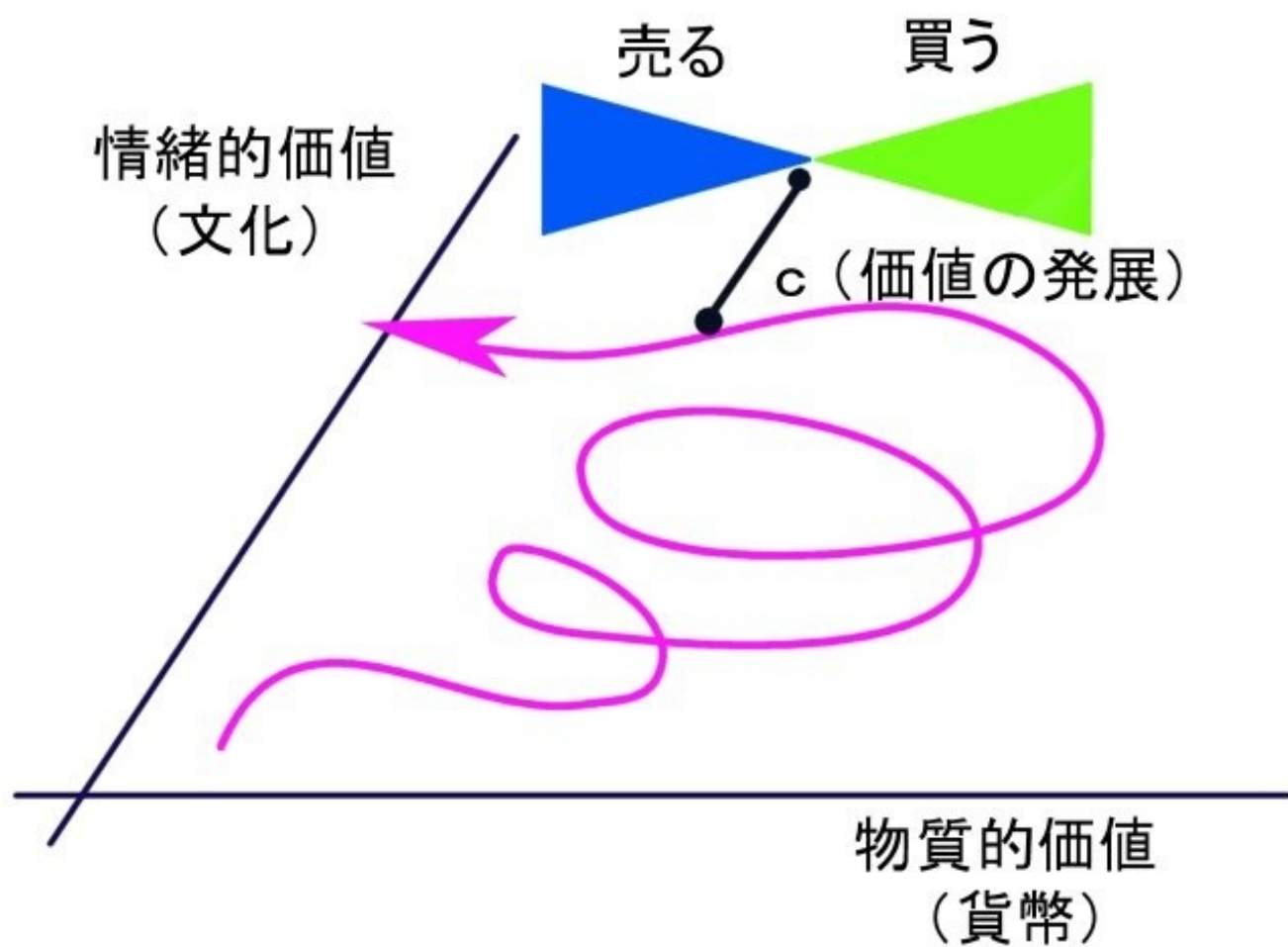
豊かにするはずであった
この人類史上最大の発明は
同時に
「宗教」をも
生み出さねばならなかった

売る 買う

買う 売る

貨幣を尺度とする物質的価値
そして
文化と称される情緒的価値

対比的二面宇宙に
生産と消費の反復により
映写される像
経済



それは
売る者　そして　買う者
両者が健全に存在して
初めて成立することは
自明の理であるが
ヒトの煩悩はそれを許さぬ

善とは
すなわち
苛烈な競争に勝ち残ることなり

よって
己
己が所属する組織
己が所属する国家
徹底的に
己の利益の追求が志向される

煩悩により
cが大きく揺らぎ
投影された映像は
歪み
醜悪ですらある

「人生の勝者」
かように称される栄誉を
求めてやまぬ感性には
大多数の「敗者」によって
支えてもらっている
己の映像が
見えぬ

かくて
極めて論理的に
ヒトは「救済」を
必要とするではないか

よって
ついに
ヒトの頭脳は
「神」という概念をも創造し
真の父なる神を冒瀆するに至った

「ヒトが創造した神」は
またしても
二つの対比的な概念により
デザインされよう

善 そして 悪
悪 そして 善

ああ
ヒトがこしらえた神は
それなりに美しく
無論それは
いとたやすく了解された

無念なることに
善 そして 悪
その識別をするのはまたしても
「全能のヒト」である

あなたにとっての善は
わたしにとっての悪である

わたしにとっての善は
あなたにとっての悪である

互いの善による
妥協を許さぬ
正義が空高く掲げられた

黙示録の始まりである

有限の生を
わずかでも富裕に彩るための
激烈なる経済競争

一個体としての
有限の生への
あくなき執着は
二面的宇宙に投影された
美の総体
すなわち生命圏の尊厳をも
蹂躪する

一刻も早く
己が
流れ続ける
生命の大河の一員であることに
目覚め

この時この地
末法の悪世に
生を受けなければならなかった
己の使命を
自覚し
競争ではなく
共生　そして　調和を
目指す価値観への
転換を果たすこと

たぶんそれは
以外にたやすいことだ

一人一人が同調し
わずかに
あのcを切り替えるだけで
すなわち
総体としての調和を目指す
「中道」を選択するだけで

投影される世界の姿は
劇的に変化するであろう

互いの胸に宿った
絶対的唯一神

それも
一つの美の総体が
多様な角度から
映写されたものにすぎぬことに
気付くのに時間はかかるまい

なにゆえ
生には苦が満ちているのか
誰しも
老 病 死 を
避ける事はできぬ

苦の存在
苦の克服

それが「彼」をして

王位
広大なる邸宅
富裕

何一つ不足なき境遇を捨て
出家に至らせた起点であるが

対比的二面宇宙の住人である
我々が
歓喜のみならず
苦悩という
相克する想念が渦巻く
時空を飛翔しつづけるのは
宿命的に
むしろ
必定である

二面宇宙においては
善があれば悪もあり
美があれば汚れもある
対称的な存在は
むしろ避けられぬことなのだ

清浄だけを
神聖のみを
追い求める姿は
むしろ
総体としての美を
歪める行為や思想であり
さらなる苦を別の形で
生むことに過ぎぬ

ゆえに
清浄　そして　汚濁
二つの互いに相克する原像を受け入れ
その反復から
創造されたる美
すなわち
総体としての美
総体としての絶対的存在を
志向すべきなのだ

その美は

絶えず

ゆらぎ うつろひ 永続せぬ

永続する生など ありえようか

永続する創造など ありえようか

きらめきであるゆえ

幻出しうる

この世にまたとなき

尊き美

それが

それが

内的矛盾を宿命的に抱えた

対比的二面宇宙の

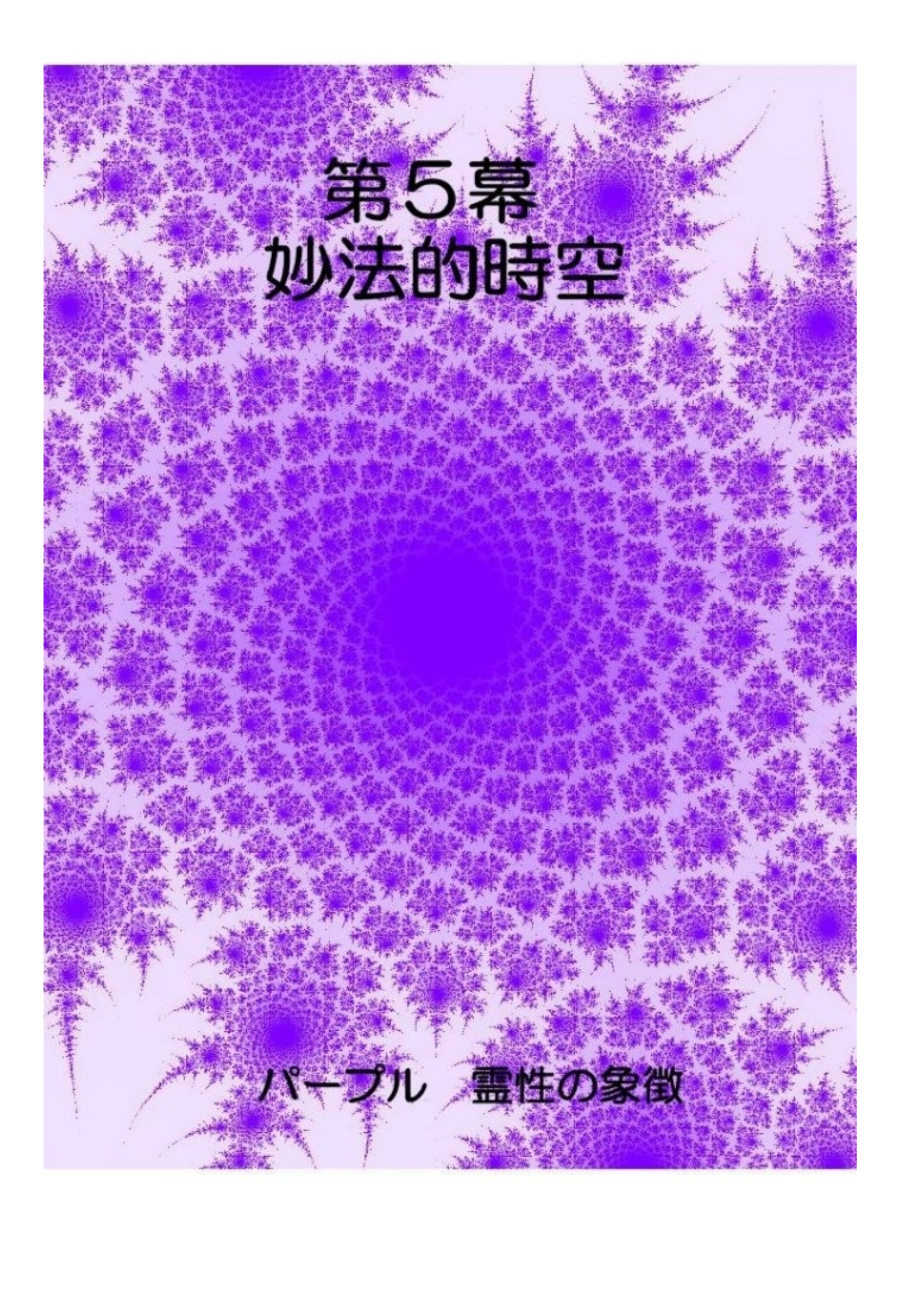
生の調和であり

生の歓喜であり

そして

それが

生の創造である

The background of the entire page is a complex, repeating fractal pattern in shades of purple and magenta. The pattern consists of numerous small, star-like or floral motifs that are interconnected, creating a dense, textured effect. The colors range from a deep, dark purple to a lighter, almost white magenta, with the text appearing in a dark, solid color.

第5幕 妙法的時空

パープル 靈性の象徴

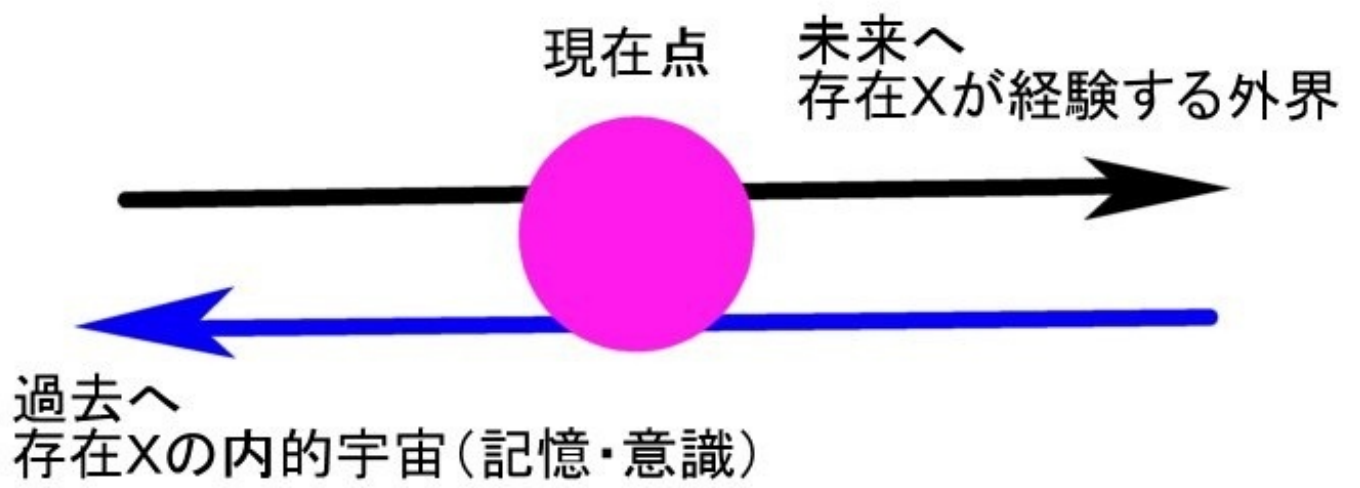
昼があり夜がある
男があり女がある
肉体があり精神がある

存在としての
妙があり法がある
法があり妙がある

そして
そうだ「それ」である
「それ」を恐れたからこそ
種としての誕生以来
ヒトは苦悩しつづけたのである

時空としての妙法
すなわち
生があり死がある
死があり生がある
時空としての妙であり法である
時空としての法であり妙である

これから私は
詩人として
時空としての妙法を
説こうと思う



ある存在Xが
経過する時間を対合する二重輪である
と仮定する

二重輪上の一点を「現在」とすると
現在点より外側の円弧が「未来」へ向かい
未来において存在Xが経験する外界を表す

現在点より逆向きの内側の円弧が
「過去」へ向かい
過去における存在Xの
内的宇宙（記憶・意識）を表す

存在Xの外側弧の未来と内側弧の過去は
互いに「対称的に対合」して
存在Xの一生を構築する

よって
存在Xは未来に向かうに従い
過去に経験したことを
対称的に立場を変えて再体験するのだ

すなわち
過去において自分が経験したこと
（内的宇宙にある記憶）を
未来における外界の様々な現象の中に見出す

あるいは
過去において外界の存在として
観察したことが
未来において自らの経験として
再体験するということが起きる

過去において

自分が他人に対して行ったことが

未来において

対称的に形を変えて自分に返ってくる

という現象

曰く

このような現象が

「因縁」と呼ばれるものであろう

因縁は

西洋哲学における

$A \rightarrow B$ （ A であるから B である）のように

明瞭に観察される因果律とは

異なる概念である

西洋哲学において主柱となる因果律は

デカルトが説いたように

いかなる時においても

どの地においても

だれにとっても

同等の結果が得られる再現性が尊ばれるが

因縁は

特定の存在 X そのものだけが経験できる

一見ランダムに見える法則である

おそらく

私たちヒトのような存在は

現在点を一点しか持たないために

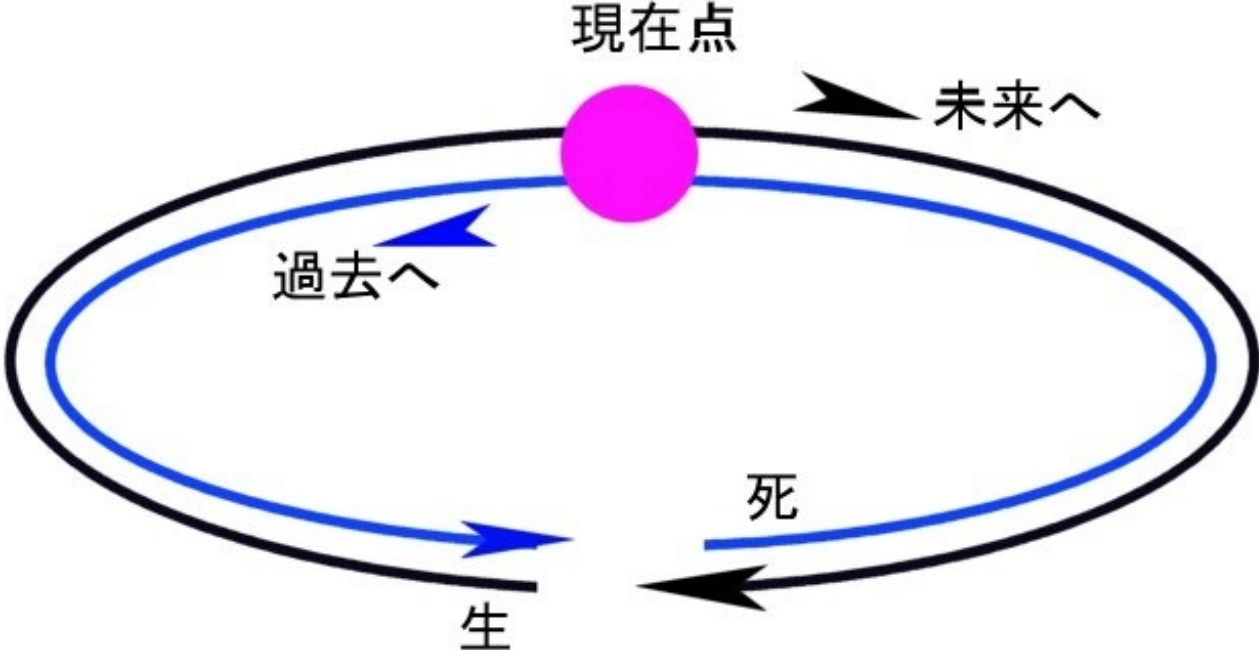
一度きりの生涯を

経験するだけであるのかもしれない

そのために

一度の生への執着を生み

苦悩を生ずるのだ



一方

素粒子のような

ミクロの世界の量子力学的存在は

現在点（周期点）を2点持ち

2通りの「現在」が存在するのかもしれない

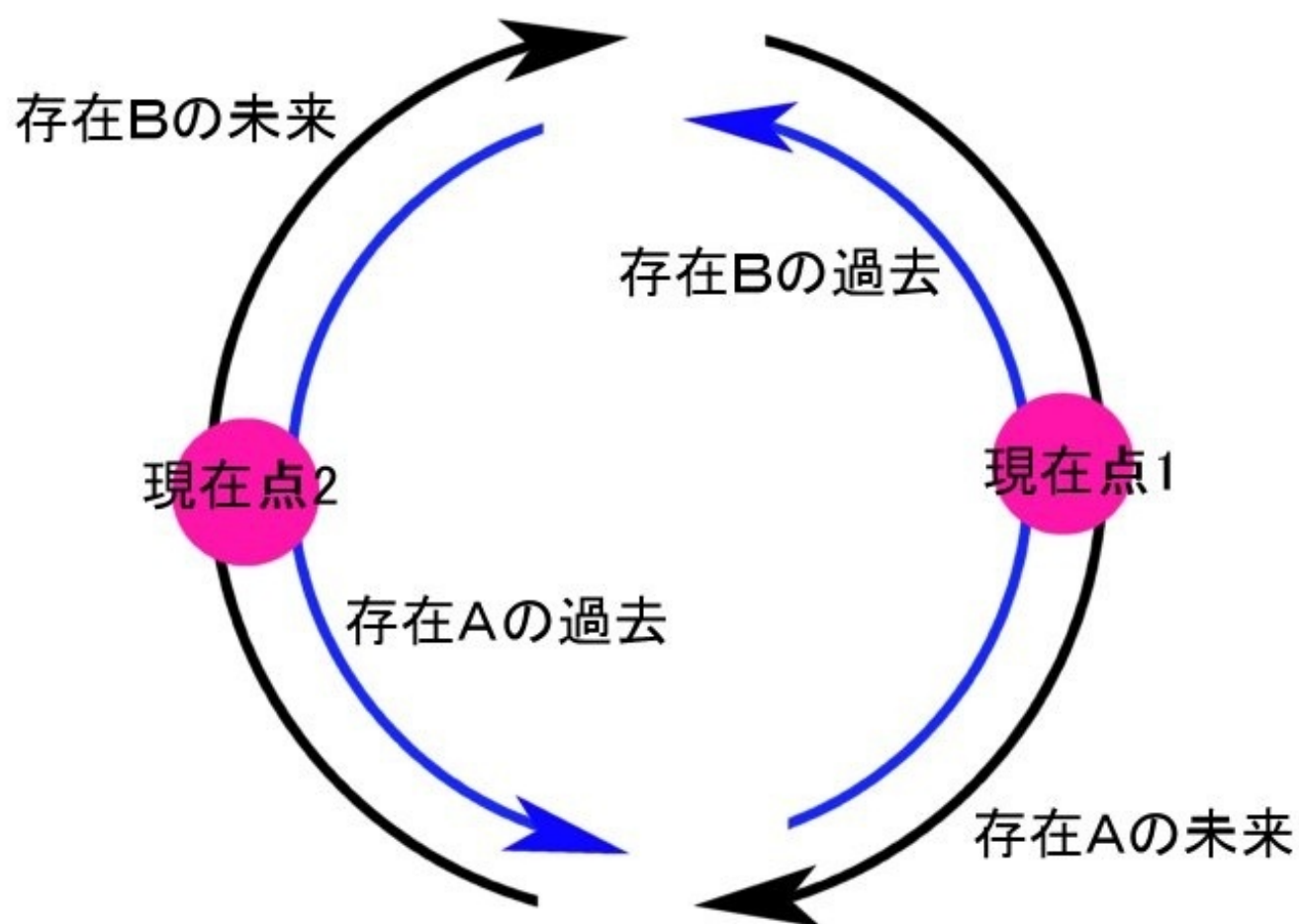
つまり

存在Aの過去と存在Bの未来

存在Aの未来と存在Bの過去

それぞれが互いに対合し

2つの現在点を生み出す



さらに

シャルコフスキーの定理は雄弁に語るのだ

フラクタルを生み出すような

周期関数において

基本周期3の周期点を持つ存在は

あらゆるすべての周期の周期点を持つ

すなわち

次ぎのような順位の

美しい自然数の法則性によって多様な周期点が生まれる

3, 5, 7, 9, ...

$2 \cdot 3, 2 \cdot 5, 2 \cdot 7, \dots$

$2^2 \cdot 3, 2^2 \cdot 5, 2^2 \cdot 7, \dots$

$2^3 \cdot 3, 2^3 \cdot 5, 2^3 \cdot 7, \dots$

$\dots 2^n, \dots, 2^3, 2^2, 2^1, 1$

存在 A の未来と存在 B の過去
存在 B の未来と存在 C の過去
存在 C の未来と存在 A の過去

互いに対合する

周期 3 の現在点を持つ存在は
全能であり

あらゆる任意の多様な現在点を
生み出すことができる

そのような

「多様な現在点」における

無限の出来事の積み重ねや関係系が
私たちを取り巻く

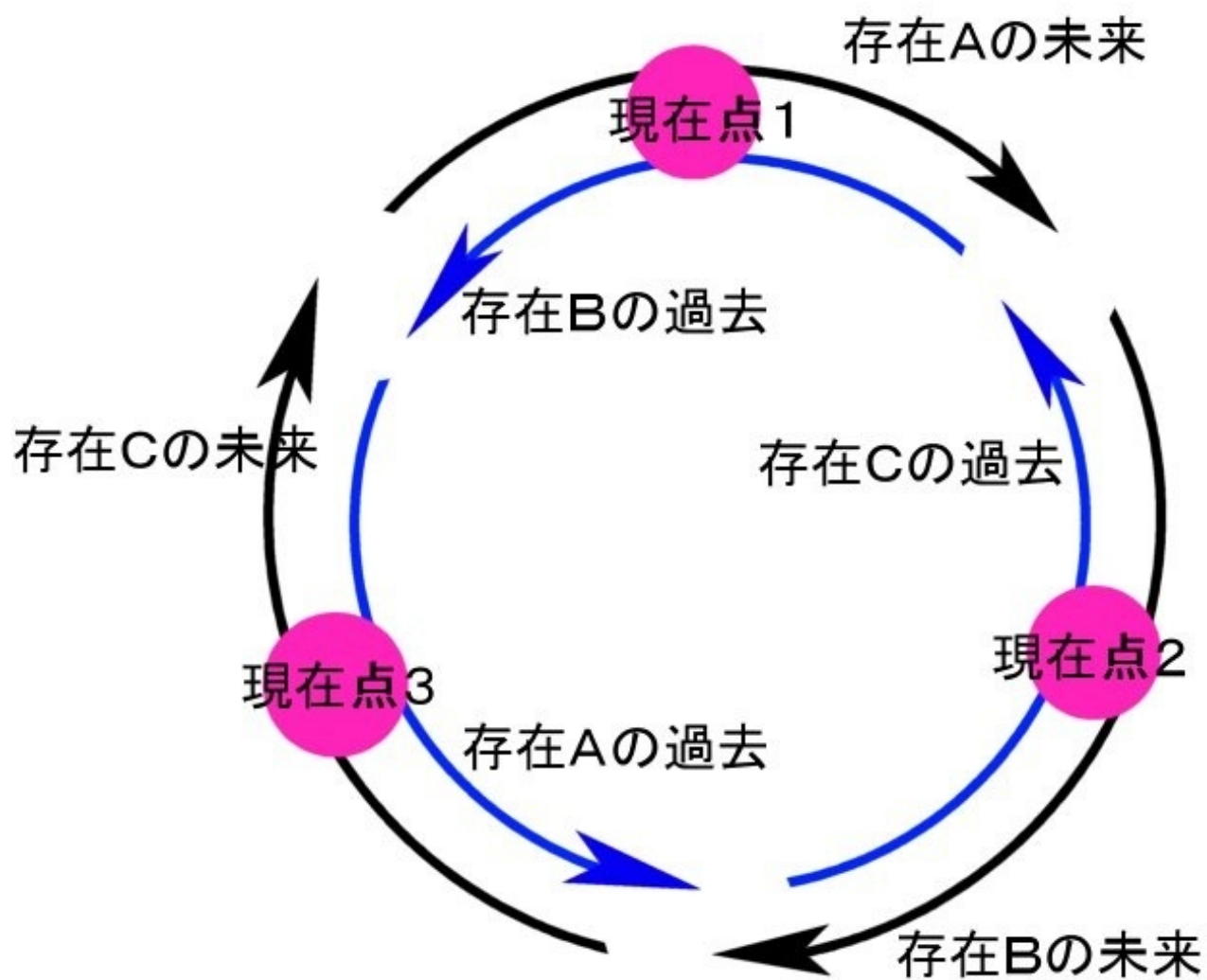
対比的二面宇宙における

フラクタルな映像

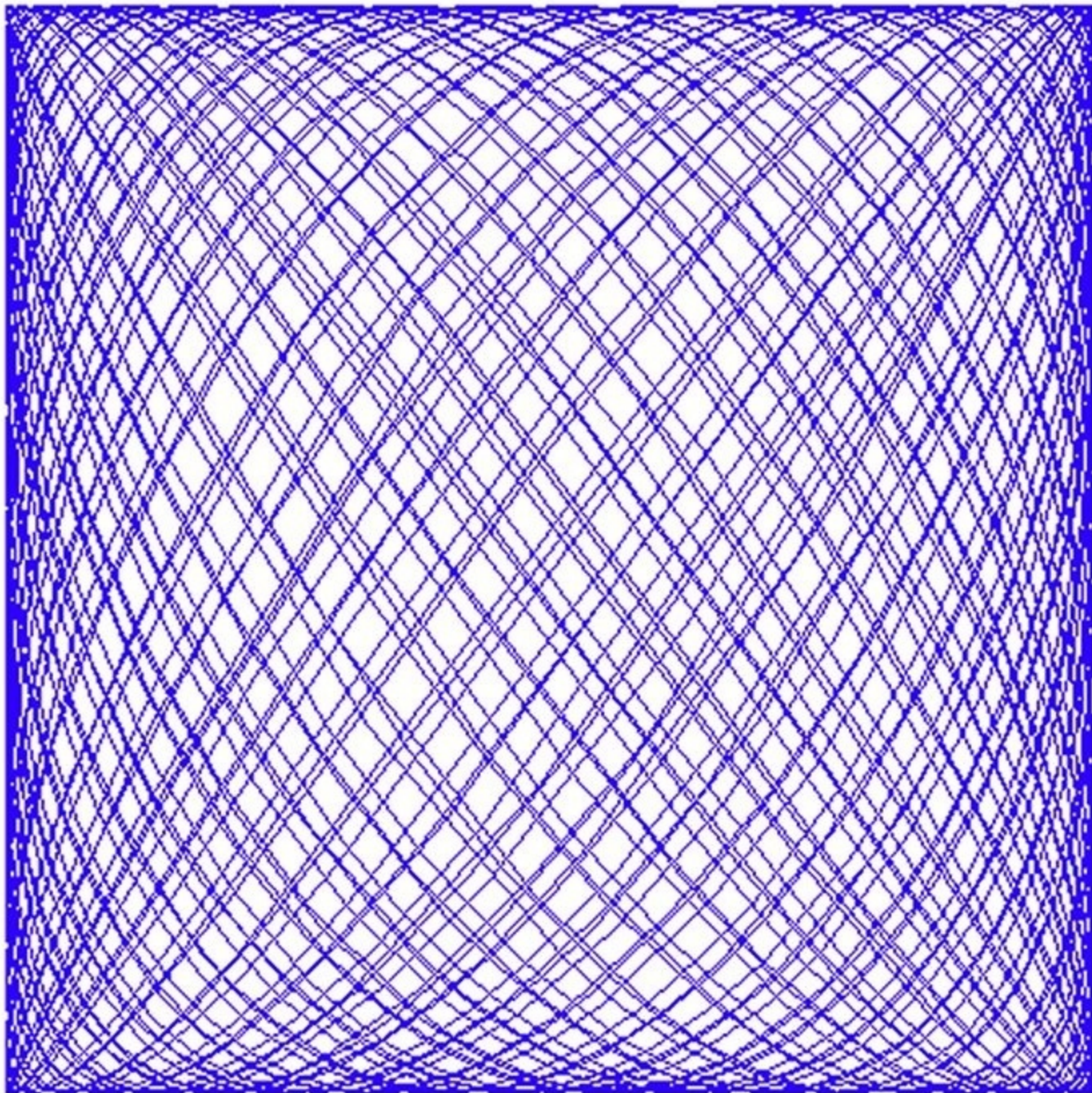
つまり

生命圏や宇宙の姿を

表現しているのかもしれない



周期3の妙法的時空・全能の存在



因縁・無限の関連系

現在・過去・未来（三世）における
周期3を持つ全能の存在
すなわち
「三世の諸佛」が
私たちの宇宙を
そして時空を
生み出し支配する存在なのだ

この妙法的時空において
過去と未来の仏は対合しているからこそ
己が犯した過去の罪を発露懺悔し
未来に向かい
明るく輝かしい想念を抱き
その想念を口にし行動することで
これまで積み重ねてきた過去の罪が
懺悔滅罪し救済されるのである

己の過去の罪を
自分自身が唱える妙法華経により
懺悔することで
己の力で
未来を善き方向に
導くことができるのだ

南無妙法蓮華経

清浄なる真理というものが
あたかも存在するかのごとく
映写機は
私たちに
肉体を持った個体としての
苦悩と汚濁に満ちた
有限の生を投影するのである

スクリーンの上で
それは
様々に乱反射し
苦悩
汚濁
失望
嫌悪の果てに
時折
綺羅と光彩を放つ

私たちが
現在の生を受ける前は無論
現在の肉体として
消失した後も
冷徹にフィルムは回りつづけるのである

そう
カラカラと
カラカラと

許されるなら
もしも許されるなら
時空の壁を破り
果てなく
繰り広げられる
その映像を見つづけることが
もしも
あなたに許されるなら

今の
あなたの自我は
そこに流れつづける映像に
あなたも
かつて抱えた
懐かしき風景を
フラクタルな風景を
再び見出すであろう

スクリーン上で
泣き
笑い
怒り
懸命に演じ続ける
「彼」に
あなたを再び見出すであろう

幾度も
幾度も

そして
やがて
気付くのだ
その映像を
見ているのは
あなた一人だけではないことに

あなたの
斜め後ろの席には
ついぞ
子としての孝徳を尽くせず
わびの言葉さえ許されず
亡くなった
あなたの父がいる

あなたの
二列後ろには
古ぼけた写真でしか
面会することのなかった
あなたの祖母が
今や明確な存在感を維持し
座っているではないか

ぽつり
また
ぽつり

一人
また
一人

自発的に
人影は増え
懐かしきカオ
記憶なきカオ
もはや
あなたの頬を伝う涙だけが
真実やもしれぬ

互いに
声もかけず
ただ
ただ
流れつづける
映像を見つめている

一緒に
一様に

気がつくと
やがて
数え切れぬ見知らぬ大観衆で
広大な劇場は埋め尽されていた

それでも
互に通じていたのだ
あなたと彼らを
結びつけるものが
かつて存在したことを

そして
これからも存在することを

やがて君は見ることになる

悲哀
憎悪
貧困
飢餓
病苦
絶望

それでも
それでも
苦悩の果てに
「生」なるものが
もたらしてくれると
すべての観衆が
祈り願い
信じたかった
あの生の歓喜がやっと演出され

映像に酔いしれる彼らが
スタンディングオベーションをもって
クライマックスを迎えるときを

そして

そして

光明が

光明が

光明が

膨らみ

広がり

迫り

びしびしと

筋肉の溝を

電光がひた走る体感

絢爛たる

轟音とともに

圧倒される思考

言語さえ禁じた

抗しがたき

耽美なる官能

あなたの はかなき感覚を

あなたの 重ねた知識を

あなたの 明かせぬ思い出を

精神を

肉体を

この世で

またとなき

たった一人であったはずの

大切な大切な

あなたを

ああ 魂を

それは
一刻なのか
それとも
悠久であったのか

判慮しがたき
明瞭な断絶の後

期せずして
あなたは
手を叩いていたはずである
喝采を送らざるを得なかったはずである

いつからか
あなたのとなりの席に
そっと座っていた
だれかと
一緒に
そうだ
誰かと

スクリーンの上に
あなたは
対比的二面宇宙の旅人として
必然的に
生がもたらす
苦悩と歓喜から構成される
普遍の尊さを
見出しえたからであり

何よりも
光明が落ち
今や
静かに絞られた
スポットに照らされ

舞台の上で
頭上から
雷鳴のごとく降ってくる
喝采に涙し
手を振り
必死で観衆に応えていたのは
如来ではなかった
神でもなかろう

あなた だった

正義と罪
拮抗する道德意識に
幾度も引き裂かれ

侵し
犯した
罪の数々に
我は仏になれぬと
諦めと絶望のもとで
幾多の前世を繰り返し
いまだ
贖罪の想いを断ちきれぬ
あなただったのだ

やがて

喝采は静まる

マイクは

あなたを待っていた

この刻を待っていた

静まり返った

広大なる闇に潜む

大観衆に向かい

あなたは

「一遍の詩」を

静かに

静かに

朗読し始めたのである

エピローグ 弥勒到来

弥勒到来

僕は
恐れていた

ずっと
畏れていた
「彼」に会えぬことを

「彼」に出会うため
「彼」を迎えるため

幾千の
行者たちが
あまたの
聖者たちが

断じ
清め
律し
行じ
そのチケットを
手に入れた

「彼のチケット」は
ピカピカで
とっても少なくて
闇でしか手に入らぬと

汚らわしき
僕なんかには
とても高くて手に入らぬと
ずっと思ってた
そう信じてた

ああ
たまらなく
神聖（ロゴス）を祈り 無垢を願い

ああ
どうしようもなく
汚濁がこびり 肉欲（エロス）に耽溺す

鋭利なるパラドックスが
周り出し

拡張し
響き
変容す

痛みに
耐え兼ね
僕は消えた

それはたんぽぽである
それはちょうちょうである

それは流星である
それは波しぶきである

それは時である
それは風である

それは夕焼けである
それは母である

それは出会いである
それは別れである

そして
それは「弥勒」である

僕の喜びに
「彼」も微笑み
僕の哀切に
「彼」も涙した

そのとき
僕は振りかえる

揺れていた
優しく
優しく
揺れていた

雲が
木漏れ日が
愛しき乳房が
「彼」の微笑が

有限なる生の
夢幻なる陶醉
無限なる交わりの
幽玄なる一体

醜かろう
僕の 肉体 が
歪んでいるだろう
僕の 精神 が
うっとおしいだろう
僕の魂 そのもの が

恥じることはないのだ
卑しむことはないのだ
まして
慎むこともない

だって
僕は
いや
僕たちは皆、「仏」の化身なのだ

たたえよ
たたえよ
苦悩を
悲哀を

たたえよ
たたえよ
嘲笑を
迫害を

たたえよ
たたえよ
障害を
貧困を

汚れなき飛翔はありえず
清らかなる昇華は
なおありえない

それが創造である
それが美である
そして
それが生の歓喜である

「弥勒」は
僕の宇宙 にいる

泣いていた

「汚れたる魂」とともに
「彼」は泣いていた
だから
僕は
顔を上げたのだ

灯明が
僕を照らす

この
卑しき存在に
それでも
生の喜びを与えたもう
朽ち果てた
尊き
幾多の魂の火だ

そのとき
鐘が鳴ったのだ
高らかに
あの鐘が鳴ったのだ

時は告げられた
時は告げられた

旅の身仕度をはじめた
群衆の中に
僕はいる

みんな

あの鐘の音を聞いたのだ

僕も立ち上がらなくっちゃ

急がなくっちゃ

誰も

かれもが

口口に

唱え始める

その合唱は

さざめき

広がり

とどろき

船と化す

鐘はまだ鳴っている

風が凧いだ

遠くでセミが鳴いている

時は告げられた

時は告げられた

船出だ

船出の刻だ

僕も船に乗らなくっちゃ

急がなくっちゃ

見送る群衆の

怒濤のような合唱に

僕は飛び乗った

ぐんぐん
ぐんぐん
押していく

ぐんぐん
ぐんぐん
滑ってく

ああ
頬が心地よい
そして
僕は微笑むのだ

愛しく煌く全宇宙
僕と一緒に
こだまする

愛しく煌く全宇宙
僕と一緒に
こだまする

愛しく煌く全宇宙
僕と一緒に
こだまする

References

本書において主に下記の文献を参照しました。

<仏法>

- ・ 日本語の法華経
江南文三 大蔵出版
- ・ 梅原猛の授業 仏教
梅原猛 朝日新聞社
- ・ 空海の風景 上・下
司馬遼太郎 中公文庫

<西洋哲学・科学>

- ・ 哲学・思想がわかる
渋谷大輔 山本洋一
三森定史 緒木周見夫 日本文芸社
- ・ 自然の中に隠された数学
イアン・スチュアート 草思社

<カオス理論>

本書に収めたマンデルブロー集合、ジュリア集合などの
Mathematicaによるプログラミングは下記の文献に従いました。

- ・ カオス力学系の基礎
ロバート・L・デバニー
アジソン・ウェスレイ・パブリッシャーズ・ジャパン
- ・ カオス力学系入門第2版
ロバート・L・デバニー 共立出版
- ・ Mathematicaによる線形・非線形力学とカオスへの入門
和田 昇 サイエнтиスト社
- ・ Mathematica理工系ツールとしての
R・E・クランドール トップラン
- ・ サイエンス・プログラミング
R・E・クランドール シュプリングー・フェアラーク東京

<色彩>

本書に収めたグラフィックスの色彩イメージは下記の文献に従いました。

- ・ あなたを変えるカラーセラピーレッスン
野田幸子 ワニブックス

私たちは皆 仏の化身である

<http://p.booklog.jp/book/44927>

著者 : K. Amakatsu

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/amakatsu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44927>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/44927>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ